

氏 名	みやもと けんいちろう 宮 本 健 市 郎
学 位 の 種 類	博 士 (教 育 学)
学 位 記 番 号	論 教 博 第 110 号
学位授与の日付	平 成 16 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	アメリカ新教育運動における教育の個別化・個性化の思想と実践 ——進歩主義教授理論の形成過程——

論文調査委員	(主 査) 教 授 田 中 耕 治	助教授 齋 藤 直 子	助教授 松 下 佳 代
--------	----------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、19世紀末から20世紀前半のアメリカ合衆国における新教育運動を対象として、一斉授業への批判として登場した教育の個別化・個性化の思想と実践の系譜をあきらかにしようとするものである。第一部（第1章から第3章）では、19世紀末から20世紀初頭にかけての学年制・学級制と進級制の改革をめぐる議論と実践を分析して、個別化と個性化の方法とその背景にあった個性概念を明らかにしている。第二部（第4章から第6章）では、1920年代から1940年代に盛り上がった進歩主義教育運動のなかで、個別化・個性化はどのような理論にもとづいて進められたか、そして、個性化・個別化と子どもの社会性の形成はどのように関連づけられたかを解明している。

第1章では、19世紀後半に学校経営の能率化を求める改革の中から誕生した、生徒のニーズに応ずる教育方法として、「個別化」と「個性化」の二つの系譜があったことを明らかにしようとしている。前者は、生徒ひとりひとりの個人差に応ずる方法であり、19世紀末では進級間隔を短期にして、できるだけ頻繁に能力に応じて学級編成を変更する方法、能力別分団法、個別指導法などがあり、20世紀になると知能テストによって生徒をコース分けしたりする方法が普及した。後者は、生徒の自発性や自主的な活動を保障する方法であって、19世紀末には優秀な生徒に自由時間を与えて自主的な学習を認める方法、学級を解体したうえで生徒が自分の選んだ教科を自分のペースで学習できるようにした実験室法などがあり、20世紀になるとフレデリック・リスター・パークの自学法やドルトン・プラン、ウィネットカ・プランへと受け継がれていったことを明らかにしている。

第2章では、「個別化」実践を支えていた「個性」または「能力」概念が、20世紀を前後する頃から、弾力的なものから、固定的なものへと転換したことを明示している。その際、その転換を導いたものとして「特別学級」の設置に着目して、この設置によって生徒の振り分けを合理化するための知能観や能力観がむしろ必要とされるようになったという事実に着目している。この点は、英才教育にも影響を与えて、「英才」は個人に特別な能力とされ、早期選抜に結びつくことになる。

第3章では、1890年代のプエブロ・プランやノースデンヴァー・プランを先駆的事例としながら、「個性化」実践に「科学的な」根拠を与えて、自発性の原理を確立したフレデリック・リスター・パークの思想と実践を究明している。パークは、G. S. ホールから児童研究の思想と方法を学んで、子どもの発達はい内的な力の展開であることを確信し、自学法を考案した。その方法は、彼の弟子であるカールトン・ウォッシュバーンやヘレン・パーカーストを通して、1920-30年代の進歩主義教育へと受け継がれていくことになる。

第4章では、1920年代から1930年代にかけての進歩主義教育運動の隆盛のなかで、「個別化」と「個性化」が相互補完の関係にあったことを年齢主義進級制の論理を分析することで明らかにしようとしている。すなわち、「ひとりひとりのニーズに応ずる」ことを名目として採用されていた年齢主義進級制のねらいは、一方では生徒を分類して、進級の基準を個人差に合わせて多様化することであり、他方では一人一人の欲求や自発性に対応して「全体としての子ども」の自発性を尊重することであった。この進歩主義教育の時代においては、個性の概念として個人差と自発性という2つの意味が共存していた

のである。

第5章では、進歩主義教育運動がこの時期に直面していたもうひとつの課題である、個別化・個性化と社会性の形成とを関連づける代表的な実践であるドルトン・プランについて分析を加えている。ドルトン・プランを開発したパーカーは青年時代に児童研究から、1920年代にはモンテッソーリが主張したリズムという考え方から多大の影響を受けた。他方、パーカーはデューイの思想から共働の原理を学び、ドルトン・プランの目的を学校の社会化、あるいは協力的コミュニティの形成と考え、個性化の原理と生徒の社会性形成との両立をめざそうとした。しかし、イギリスやアメリカの実践ではこの両立の視点は理解されなかった。

第6章は、個別化・個性化と社会性の形成とを両立させるもうひとつの代表的な実践であるウィネトカ・プランを取り上げて考察を加えている。ウィネトカ・プランは、コモン・エッセンシャルズ（個別学習）と集団的創造的活動とが並立するという形を取り、1920年代から1930年代にかけて個別学習と集団活動とを統合する方向に徐々に変化していった。とりわけ、この変化をもたらした要因として教育長と教師による実験精神に満ちた教育研究に着目している。

以上、19世紀末におこった「個別化」と「個性化」の主張を継承した進歩主義教育の意義は、両者を統合するとともに、さらには個別化・個性化と子どもの社会性の形成とを関連づけようとしたことにあった。それは、進歩主義教育にあった実験精神そのものの現れでもあったことが明らかとなった。

論文審査の結果の要旨

本論文は、19世紀末から20世紀前半のアメリカ合衆国で展開された新教育運動の特徴を、「個別化」と「個性化」という二つの異なる教授理論の位相と展開の過程として描こうとした。その際、本論文の何よりの特徴は、膨大かつ細密な統計的データを駆使して、また当時のオピニオン・リーダーたちのミニコミ誌での意見陳述や往復書簡、さらには入手しがたい当時の実践記録に至るまで博搜精査して、その理論構築にたしかな実証的裏づけを試みようとしていることである。このような研究の方法論によって、本論文は以下のような学問的な意義を獲得している。

まず第1は、新教育運動の特徴として語られてきた「個に応じる教育」の初発の動機は落第の削減という学校経営の効率化を求める要求であったことを指摘するとともに、そこには生徒の個人差に着目する「個別化」とその自発性や自主的活動を保障する「個性化」という二つの系譜が、19世紀末には同時に成立していたことを明らかにしたことである。この「個別化」と「個性化」の区別（さらには連関）の発見は、後述するように20世紀初頭に本格化する進歩主義教育の複雑な性格を読み解くための概念装置として提案されたものである。

第2に、「個別化」が前提とする「個性」または「能力」概念が、20世紀を前後して弾力的な能力観から固定的な能力観に転換したことを示すとともに、その転換が引き起こされた現実的な動機に注目していることである。すなわち、そこには便宜的に学業不振の生徒を分離するために設置された「特別学級」がその存在理由を合理化、正当化するために固定的な能力観を背景にもつ「知能指数」を採用するようになった経緯を実証的に明らかにしている。そして、この「個性」または「能力」概念の転換は、英才教育分野における開放的英才概念による「アクセレーション」から、閉鎖的英才概念による「エンリッチメント」への転換に対応していることも、前者のセントルイス・プランと後者のクリーブランド市の教育実践との対比を通じて指摘していることも大変に興味深い。

第3に、進級制と「個別化」「個性化」の関係を明らかにすることで、進歩主義教育の複雑な性格を浮かび上がらせようとしていることである。クインシーグラマースクールを先駆とする19世紀における進級制は「課程主義（merit promotion）」であり、「グレイド」とは「教材習得の段階（等級）」を示す概念であった。それに対して1920年代から1940年代に進歩主義が推進したのは「年齢主義（social promotion）」であり、「グレイド」は「在学年数（学年）」を意味するようになる。そこでは、「異常児」の分離と能力別グルーピングを行うという「個別化」の立場を前提として、知的領域に限定しない社会的、情緒的な成熟と自発性を重視する「個性化」の立場から「年齢主義」が採用されたことを説得的に示している。

第4に、アメリカの先行研究でもほとんど省られなかったフレデリック・リスター・パークの歴史的な意義を明確に定位するとともに、その影響を受けたドルトン・プランとウィネトカ・プランとの関係を教育実践のレベルで解き明かそうとしたことである。そこでは「個性化」実践を主導するパークの圧倒的な影響を受けつつも、ドルトン・プランとウィネトカ・

プランがやがて「社会性」の契機を内包するに至る実践過程を具体的な事実に即して描くことに成功している。

以上、本論文はアメリカにおける新教育運動とりわけ進歩主義教育の歴史に対して、実証的なアプローチを試みることによって、「個別化」と「個性化」の区別と連関をはじめとしてきわめて多彩な知見を数多く提起しており、その学術的価値は学術雑誌等を通じて学会においても認知されているところである。

しかしながら、このような方法論のもつ特質は、他方では教育思想の持つ歴史的な役割やその是非をめぐる価値判断の追究を背景に押しやるという側面を持つことは否めない。緻密な資料分析から取り出された「個別化」と「個性化」の位相と展開の過程も、その概念装置の妥当性について、さらには両者を並存せしめた「進歩主義」それ自体の思想構造の評価について、現代においても鋭く問われている課題を歴史の中に読み込もうとする者にはやや不満の残るところである。そのことは、進歩主義とは微妙な関係にあったデューイの思想が、その影響力があったと本論文で指摘されているドルトン・プランにおいて、はたしてどの程度の役割を演じていたのかを追究する課題とも繋がっている。

このように本論文には今後の課題を残すものの、それらは本論文の学問的意義を否定するものではなく、本人もそれらの課題を自覚してさらに研究を邁進する決意を示している。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成16年2月19日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。